

彼岸からの眼ざし

橘 右橘

技に志すということは、名人を追うこと。自分は当然至らないから生まれ出るあせりの一方で、追っている心地よさ、安心感が心を支えてくれる。

寄席文字の師、橘右近の七回忌を迎えた。国立演芸場で開催した「徳ぶ会」では、柳家小さん、内海桂子お二万の思い出話と、ご遺族が出版した記念誌「橘右近一代」の中で、嘶家を断念して寄席文字家元として立つ師匠右近の苦勞が改めて披露された。

高座の声とお囃子の聞こえる新宿末廣亭の二階での手伝いに始まった私の弟子生活は、ピラ字と呼ばれたものを寄席文字として確立したこの人を追うばかりだった。しかし生来の跳ねっ返り者の私は、やがて寄席文字一筋ではなく、千社札の「江戸文字」、歌舞伎の「勘亭流」と興味を拡げて行く。十六人の門弟の中、こんな私を見る右近師匠のやさしい眼があった。

学生の時に橘右橘の名を許されて十年、伝統工芸技術保存会に入って数年たった昭和六十年頃、転居して同い会に入会された三禮派勸亭流の二代目荒井三禮先生と出会った。三禮という名跡は、幕末の歌舞伎看板の左手、三禮堂と号した三代島居清忠から、勸亭流專業の石井三禮、初代荒井三禮、実子の二代目と続くものだ。同系の職種として伝統技術展で机を並べるようになった。

寄席文字をやり、作品から筆遣いをそこそこ見て取れるようになっていたからだろうか、見なれた歌舞伎座の勸亭流は、最初から作っ

て書くものという感じで何か壁があった。三禮派は違う。繊細華麗な一筆が基本で、大きい字はそれを塗って太くする。「本物だ」。教わりた。

三禮先生にお願いしたところ「おたくの師匠はいいの？」という当然の反応。江戸の文字の括りの中で、一緒に取材を受けることも多く、二人は当然親交がある。「いずれお話しします。とにかくやりたいんです」。師匠、ごめんなさい。

吉原に松葉屋という料亭があった。その裏の、元は芸者の置き屋だったところの一室が生徒数人のひそやかな稽古場である。絵の取組筆で強く書く寄席文字に慣れた私には、書の筆の穂先を繊細に操る勸亭流は難しかった。先生の眼にどう映ったか、頂く褒め言葉は他流の者へのお世辞にしか聞こえない。夢中で稽古を付けてもらいうちにいろいろの話を聞いた。

明治から昭和初年迄、あらゆる歌舞伎の勸亭流を書いて家元を名乗った父親の死後、仕事も名跡も若くして継いで家を支えたが、戦争で徴用に遭い、戦後すぐには歌舞伎がすたれて仕事がない。他へ就職したために必要な時に連絡が取れず、残った唯一の歌舞伎座の仕事は他の人に渡ってしまふ。結果的に親の仕事で自分の代で断つ。無念である。留守宅の戦火の中、家族が持ち出せた唯一のもの、初代直筆の手本を出版したいという意向に、ならば常用漢字を書き起こして併せて手本集

たぢばなうきつ

寄席文字書家・大有企画代表。昭和27年東京都下谷稲荷町生まれ。青山学院大学卒業。48年、18歳で橘流寄席文字勉強会に入会し、50年大学在学中に、寄席文字家元の橘右近の位で橘右橘を襲名。平成6年、歌舞伎文字の三禮派勸亭流家元二世荒井三禮の位で荒井三禮を襲名。現在、上野鈴本演芸場などの寄席看板を担当。寄席文字や勸亭流教室の講師のほか、千社札の江戸文字研究会などで江戸文字の伝承に努める。落語に造詣が深く、落語企画を手がける大有企画代表。

にしてほしいと、知り合いの出版社を紹介した。話はうまく進んだが、先生自身の心臓病で思いの他の時を経て「正本勸亭流」の出版に至る。一方で教室もカルチャーセンターにお願いして、公式に開催できるようになった。その平成二年のこと。

「名前を覚えておきなさい。えっ？」寄席の仕事と並行して懸命な稽古はしたが、本の功績が。腕もまだまだ、それに右近師匠がいる。吉原の灯りの中を独り歩く。いずれの話がその時を迎えてしまった。

谷中から近郊に移って十数年、日当たりの良い橘右近宅で、切り出した「実ハ」。歌舞伎の役のようにだなど不謹慎に思いつつ恐る恐るの告白だった。

演芸資料がぎっしり並ぶ書棚に囲まれたいつもの居間で、小作りの師匠はおもむろに立ち上がって、普段は開けないそのひとつの書棚の上の方を探り始めた。やがて手にした折本を手渡しながら、「これは三禮さんのところのとは違うけど」。

『勸亭流の手本・竹柴鴻作』とある。表看板ではなく、狂言作者に伝わる奥向きの台本用の勸亭流だが、貴重な資料だ。

「うすうす知ってはいたが、そこまで来たかい。やりたくなるんだよね」と遠くを見るような眼をした。

弟子たちの役割になっていった師匠のお供に、以来私が行く事が多くなった。最後は国立演芸場に出演の桂米朝師匠一門をたずねた

時。楽屋で私の事を頼み込むように紹介してくれた。ありがたかった。その直後、教室へ行く途中倒れた師匠は、療養のうちに世を去る。長寿の師匠にいつも甘えていた私は、大きな支えを失った。

名前を頂いた頃、三禮門下には、姓は本名、名に禮を入れた名取が二人いた。先生の希望は三の字を使うこと。三禮となり四年後に、なぜか初代の実姓も遺してほしいと言われ、荒井三禮の許し状を頂いた。

右近師匠逝去の三年後、ひと回り年下の三禮先生は肺がん倒れる。見舞いに行った六人部屋の病室、振り絞る声で、なんと戒名を言い付けた。その上「何とか歌舞伎の仕事をしてほしい。そうしたらあたしの名を……」。とんでもない、またまた教えて頂く事がいっぱいです。頑張ってください。

「今日は良く来てくれた。ありがたう。病室を出る私を送る眼が脳裏に焼き付いた。三日後に再び見舞いに行った病室に名札がない。あわてて探した集中治療室。ご家族が出て来たところだった。追う人をまた失った。不安なまま教室を受け継いだ。

記念誌「橘右近一代」の中に、師匠が閉場まで詰めていた東宝名人会の非常に古いプログラムが掲載されていた。勸亭流で書かれ、橘右近書とある。あの眼とやさしさの訳はここにあった。

彼岸の眼は、今も私の支えである。